

Catwalk



[特集]

『倉田翠ソロダンス／まつもと』

まつもと市民・芸術館
Matsumoto Performing Arts Centre

vol.
09

2026
Spring

『倉田翠ソロダンス／まつもと』
2026年1月17日(土) 14:00
1月18日(日) 14:00
まつもと市民芸術館 小ホール

構成・演出・出演：倉田翠

『倉田翠 ソロダンス／まつもと』



倉田翠はもともと長身痩躯の舞踊家らしい、きれいな佇まいの持ち主だ。でもそんな自分の見掛けなどまったく眼中にない。むしろダンサーらしさを否定するかのように、素の自分自身をさらけだしてゆく。踊るほどにダンスから遠ざかって。観客の視線に拮抗するかと思えば、慈愛に満ちた眼差しにもなる。そして身体消耗の臨界点に達したとき、小さな奇跡のような親和力

のある時空が生まれた……。

全身全霊で自分を捧げもののように差し出したあとの長い静寂。薄闇。今こっぴどに生まれた交感がゆらめいている。アリーナのような緊張感が後退し、次第に舞台は和らいだ余韻に満ちてくる。身を切るような出会いだった。これからも松本の倉田翠から眼が離せない。

石井達朗(舞踊評論家)

倉田翠はコンテンポラリーダンス界きつてのアンファン・テリブルだ。きれいに踊って夢の世界をたぐり寄せようなどという意識がない。同時代を生きている人たちが掛け値なしで、生々しく出会う——身体がそんなふう立ち現れるのが倉田の作品である。倉田がまつもと市民芸術館舞踊部門の芸術監督になって初めて見せたソロ。相当な覚悟をもってのぞんだのだろう。タイトルにある「まつもと」からもそのことが伺える。

小ホールの四方が観客席で囲まれ、にぶく黒びかりする床が妙な緊張感をたたえている。劇場というよりアリーナ(闘技場)の雰囲気だ。唐突に短パンの倉田がそこに駆け込んできた。放たれた獣のよう。すぐに引っ込むと再びあらわれ、今度は観客席をゆっくりと見まわす。夜のじまをさぐるような眼差し。そんなふうにして始まった。

倉田の視線と観客の視線がスパークする。しかし、しばらくすると緊張感のなかにどこか優しさが……。

気がついてみると四角形の四隅にはそれぞれペットボトル、長机、椅子があり、私のすぐ前にはスニッカーズがぶら下がっている。これもまた夢みる時空に誘わない倉田の装置なのだろう。舞台は虚構でなく、現実から地続きなのだ。サンIIサーシスの『死の舞踏』が鳴りひびく。骸骨が夜明けまで踊り狂うという曲想で、倉田は四肢の激しい動きを見せる。からだを消耗しまくると、長机にぶっ倒れる。ペットボトルの水を飲み、踊り、息をつぎ、取り憑かれたようなモノローグがあり、また踊る。観客と対話もすれば、栄養補給が必要になればスニッカーズにかぶりつく。そんな一連のプロセスを倉田は決して「ナラティブ」(物語性)の場にしない。

ひらく古典のトビラ其の5
『みんなのための古典芸能』
2026年2月14日(土) 14:00
まつもと市民芸術館 小ホール

企画・構成・進行：木ノ下裕一
上方落語：桂吉坊／(舞台手話通訳) はせ亜美
瞽女(ごぜ)唄：広沢里枝子
手話狂言：日本ろう者劇団(江副悟史 砂田アトム
鈴まみ 五日市十夢 長谷川翔平
(声の出演) 三宅狂言会

瞽女歌



手話狂言



落語



ひらく古典のトビラ其の5 『みんなのための古典芸能』

木ノ下裕一芸術監督が立ち上げた「ひらく古典のトビラ」シリーズ。その第5回は特に視覚・聴覚に障害のある人も楽しめる工夫が凝らされたものとなった。

開演15分前、まずは木ノ下と手話通訳が登場し、能舞台やセットについて丁寧に事前解説を行った。「幕には大きな松が描かれており、その松の色は黄緑、深緑など多種多様で華やかでございます」と、視覚に障害のある人に向けた説明でありつつ、ユーモラスな語り場に場が温まる。「舞台の奥まで私の歩幅で7歩」と自身で右へ左へ移動し、音で空間が把握できるように、時に地声で解説も。健常者の私もあるほどと思えて、劇場という空間の居心地が良くなった気がした。

開演時間になると木ノ下が再登場し、企画への熱い思い、早い段階で満席になったこと、演目の楽しみまで語り、次いで手話狂言の指導者でもある狂言師の三宅近成にバトンタッチ。劇団の

ACCESSIBILITY

成り立ちから、狂言の魅力、演目のあらずじまでを解説。「あらずじがわかっても楽しめるのが古典なんです」。

そうして第一部 手話狂言『六地藏』が始まった。手話狂言とは、演者は手話を使いながら演じ、同時に舞台袖で台詞が読み上げられるというもの。解説があった為、台詞も聞きやすい。驚きだったのは、手話表現が明らかに狂言のわかりやすさ、滑稽さを引き立たせていたこと。例えば、頻出の台詞「心得たー」の手話は胸を撫で下ろす仕草であったり、「びっくり」は、目が飛び出る振りをしていたりという具合だ。

続いて、警女唄。始まる前の木ノ下の細やかな解説ののち、盲導犬と共に歌う広沢里枝子が3曲を披露した。柔らかな物腰の広沢から、荒々しさと繊細さが同時に聞こえてくる。物語『葛の葉子別れ』の「段」では、言葉の歌詞が時折わかりづらい場面があったが、近くの席の方のポータブル字幕を手ラツと拝見して納得、歌詞がわかることで世界観にもひたることができた。

第二部も、木ノ下のユニークな解説

からスタート。落語の見どころは、高座の隣で行われた同時舞台手話通訳だ。桂吉坊の緩急効いた表現に引き込まれた『たちきり』、蔵の戸をビシヤリと閉めてしまふ場面では、手話でパチン！と手を叩き音を出していたが、邪魔になるところか、情景描写に一役買っていたと感じるほどだった。

最後の座談会では、木ノ下、手話狂言に出演し、落語の手話通訳を監修した江副悟史、広沢、吉坊が登壇。落語の同時通訳を行ったはせ亜美も参加、「人物の入れ替わりが多いので、今登場人物の誰の通訳をしているのか理解しながらやるのに苦労した」と落語の手話通訳の難しさを語っていたのが印象的だった。

木ノ下が締め言葉で、全ての舞台でこのような配慮をスタンダードにしたいと話していたが、本当にそうだったならどんな世界になるだろう。障害のある人が過ごしやすい世界は、全ての人にとって過ごしやすい世界と言われるが、それが少し実感できたような、まさに「みんなのための」企画だったと思う。

松永大地（ライター）

「五感で感じる伝統芸能の世界」を目指して、芸術監督団長・木ノ下裕一が企画・構成・進行を手がける「ひらく古典のトビラ」。2月に行われた「其の5」の出演者の1人が、「警女唄うたい」の広沢里枝子さんです。警女唄とは、盲目の女性の旅芸人たちが三味線を携え村々を回りながら披露した唄のこと。警女唄の「身になって唄え」は、木ノ下がアクセシビリティを考える上でも大切にしていることだと言います。

木ノ下さんはドキュメンタリーで広沢さんのことを知ったそうですね。

木ノ下 僕の出演しているNHKラジオ番組の初代プロデューサーが「視覚障害ナビ・ラジオ」も担当していて、以前から広沢里枝子さんという素敵な方がいらっしやるというお話は聞いていました。それで広沢さんのドキュメンタリー番組を拝見したのですが、広沢さんの生命力がある唄声の素晴らしさはもちろん、「警女唄がこんなふう継承されているんだ」ということに驚きました。広沢さんは盲導犬のソフィ

「身になって考える」

広沢里枝子 × 木ノ下裕一

アちゃんとあちこちを回って、警女唄だけじゃなく警女唄の歴史や視覚障害に対する正しい知識を伝えようとしていて、「あ、これは現代の警女だ」と思ったんです。

——広沢さんが警女唄と出会ったきっかけは？

広沢 最初に知ったのは、『絵日記警女を訪ねて』という斎藤真一さんの画文集でした。その後、2001年に下重暁子さんとお会いする機会がありました。「最後の警女」と呼ばれた小林ハルさんに聞き取りした『鋼の女最後の警

女・小林ハル』を書かれた方で、下重さんが「ハルさんのところにお話を聞きに行かない？」と勧めてくださったんです。で、ハルさんが入居していた新潟県黒川村の盲老人ホームへ私が担当しているラジオ番組の取材に行きました。

施設長さんからは「ハルさんは101歳になつておられるので、唄っていただくことはできませんよ」と言われていたのですが、その時1曲唄ってくださったんです。その声がものすごく……山がゴーっと鳴る感じというか、感動と言葉でちょっと表現できないのですが、私



広沢里枝子 Rieko Hirasawa

1958年、静岡県沼津市に生まれ、長野大学福祉学科卒。進行性の網膜の病気のため、長野大学在学中に急速に視力が低下。26才で失明したが、盲導犬を得て、2人の息子たちとともに積極的に街に出るようになる。SBCラジオ「里枝子の窓」パーソナリティー。2014年から、萱森直子氏から越後警女唄を習う。各地へ出かけ、障害者と非障害者の架け橋として、講演や越後警女唄(えちごごぜうた)の演奏など、幅広く活動中。



は「キャッ」と叫んで身体がガタガタ震えて、涙が止まらなくなっちゃったんですね。上手に唄おうとか、人に褒められようといった欲の一切ない、無私の心が神秘的の声を発するのをあのとき私は聞いてしまった気がします。それが、今も私が警女唄を唄うときに思い出す根っこの感覚です。なので、105歳で小林ハルさんが亡くなられたときは「ああ、これで警女唄が終わってしまった」と思ってしまった。

その後、広瀬浩二郎さんという民俗学の学者が警女さんの活動や存在についてアメリカで講演し、評判になってることを点字新聞で知り、「警女唄の灯を守るために、私にもできることがありはしないか、誰かハルさんの芸を受け継いだ方はいないだろうか」と調べたところ、ハルさんが90歳を過ぎてから、萱森直子さんと

いう晴眼の女性に警女唄を伝承されたことがわかって、大雪の中、萱森先生のコンサートに向きました。

あまりに感動して、終演後、初対面の萱森さんの手を握って、「お稽古に伺わせていただけないでしょうか」と言ってしまったのですが(笑)、先生が「私で良かったら」とおっしゃって、2014年から新潟市の萱森先生のところへ盲導犬とお稽古に通うことになったんです。

木ノ下 ドラマティックですね！

広沢 (笑)。私は、若い頃から声で自分を表現したい気持ちはあって、それまでも長唄や演劇、朗読などさまざまなことをやってきたのですが、あるところまではスツと行けるんだけれども、「見えない」ことが壁になってしまふ瞬間があるんですね。でも警女唄では、楽譜は見なくて

する部分の両方が必要なので。劇場のアクセシ

ビリティについて考えるときも、どういう字幕をつけたらいいか、どういう説明の仕方がいいか、身になって考えようと努めます。当事者でない私は何もわかっていないということが前提で、だけれども「見えなかったら、聞こえなかったらこの時どういう気持ちになるかな、この説明の仕方でイメージしてもらえかな」ということを想像するしかない。「ひらく古典のトビラ」でもそこは大切にしています。

広沢 「ひらく古典のトビラ」の前説で、木ノ下さんは一回マイクを外して、「一步、二歩、三歩……」と言いながら舞台の奥行きを伝えてくれましたよね。マイクを使わず足音を立てて歩いてくださったので、木ノ下さんがどこにいて奥行きがどのくらいなのか、床板がどんなな

のか響きから伝わってきて、「身になって」

くださったんだなと思いました。木ノ下 ありがとうございます。同時に広沢さんのような当事者の方と一緒にアクセシビリティを作っていくのも大切ですね。「身になる」は奥が深くて終わりがいい。

広沢 そうなんです。警女唄も、毎回「身になってきたかな」と考えつつ、でももっと先がある感じがしています。

——来年2月の「ひらく古典のトビラ」に、広

沢さんがまたご出演されることになりました。広沢 次回は浪曲の玉川奈々福さんと共演させていただけるといふことで、奈々福さんは私の師匠である萱森先生と何回も共演されていて、「カッコいいのよ」といふお話は何度も聞いて

おりました。共演が楽しみです。

木ノ下 「ひらく古典のトビラ」シリーズは最初はビギナー向けにひらく意味合いが強かったのですが、今はこれまでさまざまな理由で古典に触れにくかった、あるいは劇場に足を運べなかった方にもひらいていこうという意味合いが強くなりました。今回、劇場スタッフの皆さんのものすごい頑張りのおかげで、やっとその入り口に立てたかなという感じです。今後も続けていきたいと思っていますし、このシリーズを通して、その芸能の味や魅力が一番伝わるアクセシビリティの事例を作っていきたい、それがどんな波及していけばいいなと思っています。ちなみに広沢さんと玉川奈々福さんの二人会では思い切り視覚障害の方に向けた形でやりたいと思っていますので、お楽しみに。



MESSAGE

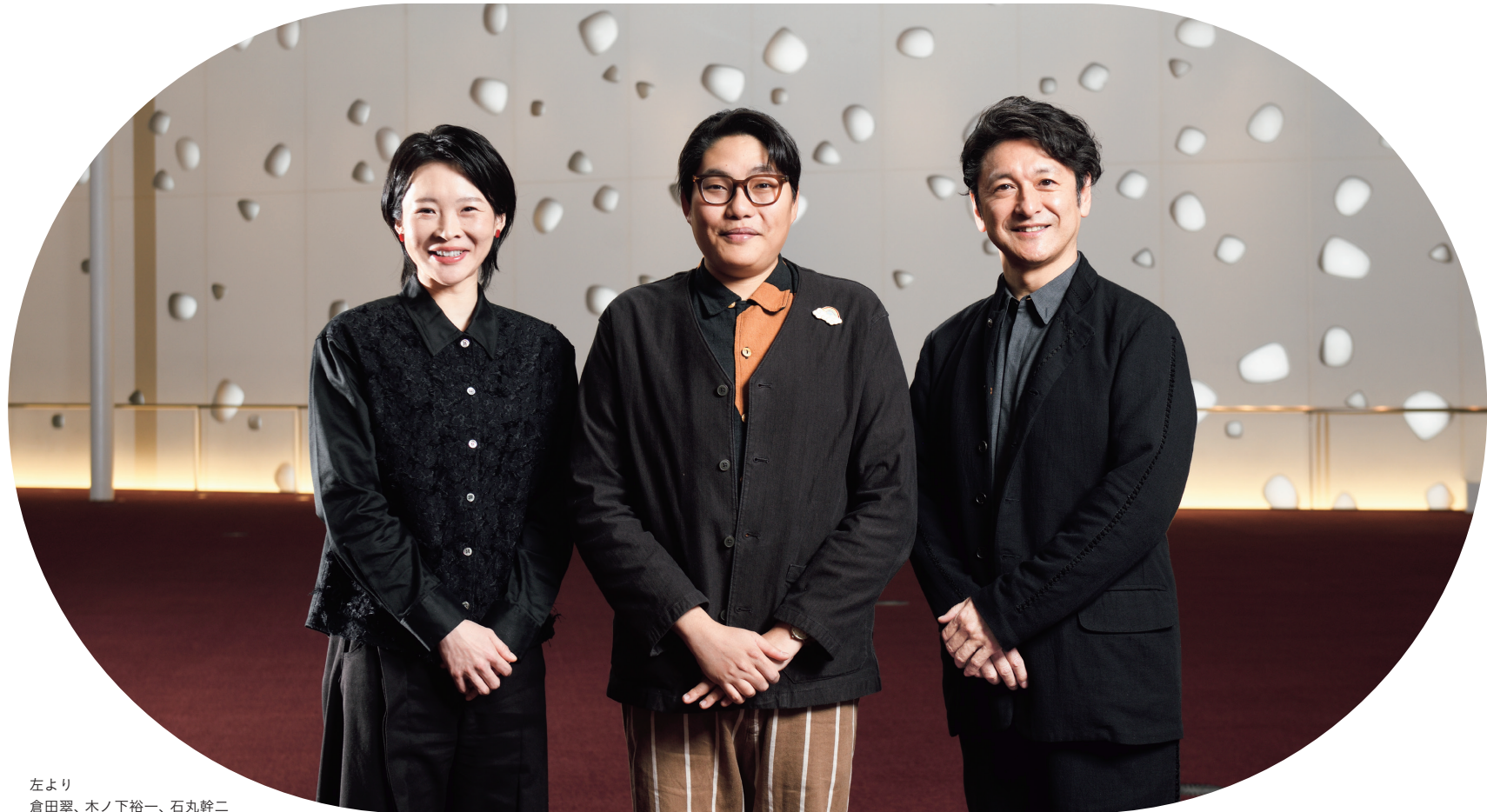
倉田 翠 芸術監督【舞踊部門】

「なんでもとりあえず3年やってみないとわからない」とよく言いますが、監督団として活動し出して3年目を迎える今、改めて芸術監督とは何だろうか、と考えています。

今年は、1月にはじめて松本でソロダンス公演をさせていただきました。私はコンテンポラリーダンスというジャンルの中でも、かなり端くれにいますか、簡単に言うとヘンテコな作家です。ソロを経て、芸術監督としての私ではなく、作家としての私を松本の皆様に知ってもらえたのではないかな、と思っています。ハラハラしましたが、安堵したような気持ちもあります。

木ノ下さん、石丸さんは、その私のヘンテコな部分を非常に肯定してくれます。自分はこういう人間なんだから、カッコつけず、かみ過ぎず、私ができること、やりたいことをやっていくことが監督として必要なことなのではないか、と今は思えて来ています。

街にも慣れ、すっかり「ただいま」という感じになってきた松本。まだまだ知らないこともたくさんありますが、ここまで関わってくださった方々との出会いを大切に、またこれからの出会いを楽しみに、自分がここで出来ることを模索し、益々皆様に楽しんでいただける劇場になれるよう頑張りたいと思います。



左より
倉田翠、木ノ下裕一、石丸幹二

石丸 幹二 ゼネラルアートアドバイザー

監督団の活動も、はや3年目に入ります。今シーズンは特にホールが改修工事に入っており、さまざまな制約がでています。こういう環境だからこそ生まれるモノ作りをと、木ノ下裕一さん、倉田翠さんと知恵を出し合っています。三人寄れば何とか…というように面白いアイデアが出ています。芸術館2階の「シアターパーク」などで気軽に立ち寄っていただける企画など随時発表してまいります。

そのほか、音楽関係の公演についてお知らせいたします。例年主ホールで開催していた『はじめまして!』コンサートは、松本市音楽文化ホールでの開催となります。今年は私たちの隣国である中国、韓国のアーティストが加わります。

また、かねてからの願いでもあった市内の施設でのパフォーマンス『おでかけ版はじめまして! (移動玉手箱)』を合併地区でもある西部地区の学校の生徒さん向けに開催します。

そして、私個人の活動としては、松本市音楽文化ホールで、チェリストの宮田大さん、ギタリストの大萩康司さんと共に、歌、朗読のコンサートを開催します。また、市内の病院を訪問し歌唱を聴いていただく、小規模のコンサートを実現させます。

ホームグラウンドが使えない時期だからこそ、“まつもと市民芸術館”に集う面々のパフォーマンスを広くお伝えする機会になればと願っています!

木ノ下 裕一 芸術監督団 団長/芸術監督【演劇部門】

2026年度の芸術監督団のテーマは昨年度に引き続き“飛び出す!”です。

折しも当館は大規模改修中。「せっかくなら、この状況を逆手にとって」「そうそう、これまで出会えなかった市民のみなさんにこちらから会いに行こう!」「劇場を飛び出して、いろんな場所で公演やイベントができるといいよね!」……と監督団三人は意気投合しました。

いよいよ“飛び出す”活動が本格化させていくのが今年です。

私の活動に限定して申し上げますと、古典企画「ひらく古典のトビラ」はキッセイ文化ホールをはじめ市内の会場で公演。ワークショップや学校でのアウトリーチも含め、いくつもの場所に出向いていきます。

また、就任以来一貫して大切にしてきた、障害のある方に劇場文化を届ける取り組みにもより力を入れていきます。まつもと市民芸術館制作の木ノ下歌舞伎『心中天の網島 アクセシビリティ版』は、舞台手話通訳や字幕、視覚的な情報をリアルタイムで実況する音声描写など、視聴覚に障害のあるお客様への数々のサポートを演出に組み込んだ舞台です。これを、松本を含め、全国9都市で上演します。

劇場文化を広くお届けしたい。

私たち監督団もまた多くの土地や市民のみなさんとの邂逅を経て、新たな刺激を受け、心境や発想も深化していくことでしょう。監督団第1期(3年間)の最終年にふさわしく、松本を謳歌したいと思っています。

早いもので芸術監督団は就任3年目を迎えます!
令和8年度は主ホールに続き、小ホール、オープンスタジオも改修工事に入ります。
使える施設は少なくなりますが、そんな時期ならではの事業の企画が目白押し。
どうぞ注目ください。

3人のダンス作家が 見せた「現在地」。

Sakurai Takuto



Miya Yusuke



Onaya Rion



StepM

ショーイング

— 3人のダンス作家による試演会 —
レポート

2024年度に始動した、松本から世界を目指すダンス作家の育成プログラム「StepM」。育成対象者である3人のダンス作家（宮悠介・女屋理音・櫻井拓斗）は、多彩な講師陣を招いたワークショップや松本での滞在を通して、それぞれの表現を掘り下げてきました。その成果をはじめて一般に公開したのが、2025年12月13日・14日に開催された試演会。市内外から観客が集まり、熱気に満ちた2日間となりました。

宮悠介は『SkinGrounD//掻破//~scratching boards of the body~』で、多様な舞台装置を用い、自らの皮膚を地形として読むことからダンスを立ち上げました。舞台上では、映像によって皮膚の表面や松本の山の風景、そして個人的な記憶が重ね合わされています。ゆっくりと自分自身に向き合う宮の身体感覚は、没入的な空間の中で観客にも共有されていました。

女屋理音も同じく登山の経験に着想を得て、『雪嶺』と題したソロを発表しました。作品は、張り詰めた空気の中、彫刻や操り人形のような動きから始まります。途中にはホームビデオが再生され、次第に激しさを増す動きによって負荷をかけられた身体とのコントラストのなかに、孤独で切実な探究の過程が垣間見えました。

櫻井拓斗が複数の演者と試みたのは、『不快な居場所脱出装置の発明』です。インターネットミーム的な現象に興味を持つ演出家/ダンサーの櫻井は、思わず笑いがこぼれてしまう、不思議な動きや言葉の道具箱のような舞台を作り上げました。その反面、作中では櫻井自身が繊細なソロダンスを見せ、作品のさらなる発展の可能性を感じさせました。

作家たちが自らの身体に向き合い、踊ることの意味を問いながら、それぞれの「現在地」を共有した2日間。熱量とアイデアにあふれた作品群は、今後ブラッシュアップを経て、今年5月に本公演を迎えます。3人はいま松本で何を感じ、何をダンスに託そうとするのか？ 劇場空間でその表現に立ち会えることに、いまから期待が膨らみます。

白尾芽(ダンス研究/編集者)



StepMのウェブサイトでは、育成過程のレポートや、育成対象者によるテキストを公開中です！

Photo : Takeshi Hirabayashi

公演情報はぬり絵の後にも掲載しています

5月9日発売

まつもと市民芸術館プロデュース
木ノ下歌舞伎『心中天の網島』
アクセシビリティ版

作：近松門左衛門
監修・補綴：木ノ下裕一
演出・作詞：糸井幸之介
出演：
日高啓介 湯川ひな 伊東沙保
西田夏奈子 武居卓 緒方壮哉 大鷹明良 ほか

松本公演 小ホール

7月10日(金) 14:00、11日(土) 14:00、
12日(日) 13:00

料金：全席指定(税込) 一般 ¥4,500/U25 ¥2,000
障がい者割引 ¥4,000/セット券 ¥8,000

※未就学児入場不可
※U25(25歳以下) チケットは枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認をご提示ください。

《セット券注意事項》
・木ノ下歌舞伎『心中天の網島』一般券1枚と、花組芝居
『レッド・コメディ〜赤姫記〜』一般券1枚のセット券です。
・2公演で一般 ¥9,000のところ ¥8,000でご覧いただけます。
・前売券およびまつもと市民芸術館チケットセンターのみ取り扱い。
・予定枚数に達した時点で販売終了となります。

神奈川公演 KAAT神奈川芸術劇場(大スタジオ)

6月27日(土) 17:00、28日(日) 13:00

料金：全席指定(税込)
一般 ¥5,000/U24 ¥2,500/障がい者割引 ¥4,500

※未就学児入場不可
※U24(24歳以下) チケットは枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認をご提示ください。

東京公演 吉祥寺シアター

8月5日(水) 18:30、6日(木) 14:00、
7日(金) 14:00、8日(土) 13:00/18:00、
9日(日) 13:00

料金：全席指定(税込)
一般 ¥5,000/U25 ¥2,500/障がい者割引 ¥4,500

※未就学児入場不可
※U25(25歳以下) チケットは枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認をご提示ください。

《障がい者割引の注意事項》
・当日障害者手帳をご提示ください。
・移動に介助が必要な方には、介助者1名につき
一般料金の50%を割引いたします。
・まつもと市民芸術館チケットセンター(窓口・TEL)
にてご購入ください。ネット予約不可。



シールをはるところ

シールは「まつもと市民芸術館」でもらえるよ(先着500名)

『Catwalk/ねこあるき』Vol.9

2026年 3月31日発行

発行 まつもと市民芸術館
〒390-0815
長野県松本市深志3丁目10番1号
Tel 0263-33-3800 Fax 0263-33-3830
E-mail mpac@mpac.jp
URL <https://www.mpac.jp>

デザイン 清水貴栄・小林慎太郎
印刷 藤原印刷株式会社

※禁無断転載

■郵送サービス

『Catwalk/ねこあるき』の郵送をご希望の方は、
郵送費用分の切手(1号180円)を下記へお送りい
ただければ送付いたします。その際、お名前・ご
住所・何号をご希望かを必ずご明記ください。

〒390-0815 長野県松本市深志3丁目10番1号
まつもと市民芸術館 広報誌担当 宛

『Catwalk/ねこあるき』は、まつもと市民芸術
館のほか、市内公共施設、市内飲食店、全国の
劇場施設などに置いてあります。

■チケット購入・お問い合わせ

[まつもと市民芸術館チケットセンターのご案内]
①電話 0263-33-2200(10:00-18:00)
②インターネット <https://www.mpac.jp>
(要事前会員登録・無料)
③窓口 芸術館1階(10:00-18:00)

■芸術館チケットクラブのご案内

※まつもと市民芸術館ホームページよりご登録ください。
※インターネット予約が可能(一部公演をのぞく)。
※メールマガジンにて最新のチケット情報や公演案内を配信。

■アクセス

【バス】JR松本駅お城口(東口)より、
駅前バスターミナルから「市民芸術館前」下車

【徒歩】JR松本駅お城口(東口)から
「あがたの森通り」を東へ800m、徒歩10分

※駐車場の用意はございません。
公共交通機関や有料駐車場をご利用ください。
※近隣商業施設等への無断駐車は
他のお客様のご迷惑になりますのでご遠慮ください。

『Catwalk/ねこあるき』は、まつもと市民芸術館の広報誌です。『Catwalk』は芸術館の情報『ねこあるき』は街の情報を中心に紹介し、両側から読めるようになっています。またCatwalk(=キャットウォーク)とは、劇場のステージや客席の上のスタッフしか歩かない細い回廊のことを言います。



ぬり
えり

ここは「つぎの劇場」です。役者たちに色とセリフがまだついていません。

つぎを 書いて 劇を 完成させてください。完成できたら 金メダルシールを もらえます。

発売中

『娑婆 身体表現クラブ』

4月18日(土) 14:00、19日(日) 14:00
小ホール

構成・演出：倉田 翠
出演：中條 玲 西田悠哉 花形 慎 堀田康平
前田斜め/倉田 翠

料金：全席指定(税込)
一般 ¥2,000/U25 ¥1,000

※未就学児入場不可
※U25 (25歳以下) チケットは枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認をご提示ください。



公演情報はぬり絵の後にも掲載しています

4月4日発売

『Step into the world from Matsumoto』

5月22日(金) 19:00、23日(土) 14:00、
24日(日) 14:00
小ホール

指導・監修：倉田 翠
出演：女屋理音 櫻井拓斗 宮 悠介 ほか

料金：整理番号付自由席(税込)
一般 ¥3,500/U25 ¥1,500

※未就学児入場不可
※U25 (25歳以下) チケットは枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認をご提示ください。



発売中

みんなのコンサート 『はじめまして!』

4月26日(日) 11:00
松本市音楽文化ホール(ザ・ハーモニーホール)

出演：石丸幹二 木ノ下裕一 倉田 翠
クリヤ・マコト(ピアノ) 林 周雅(ヴァイオリン)
JKim(キム・ジーヒョン) マー・ジンジン(揚琴) ほか

料金：全席指定(税込)
一般 ¥3,500/U25 ¥2,000/小学生以下 ¥1,000
おやこ券 ¥4,000 (枚数限定・前売のみ)

※2歳以下のお子様は、保護者1名につき1名まで膝上鑑賞無料。
席が必要な場合はチケットが必要です。
※U25 (25歳以下) チケットは当日年齢確認をご提示ください。

《おやこ券について》

- ・一般1名と小学生以下1名のペア券となります。
- ・お申し込み後、変更・キャンセルはできません。
- ・予定枚数に達した時点で終了となります。
- ・おやこ券のお客様は2名ご一緒に入場してください。



5月9日発売

木ノ下裕一セレクト 花組芝居 『レッド・コメディ〜赤姫祀り〜』

7月17日(金) 18:30、18日(土) 13:00
小ホール

脚本：秋之桜子
構成・演出：加納幸和

料金：全席指定(税込)
一般 ¥4,500/U25 ¥2,000/セット券 ¥8,000

※未就学児入場不可
※U25 (25歳以下) チケットは枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認をご提示ください。

《セット券注意事項》

- ・木ノ下歌舞伎『心中天の網島』一般券1枚と、
花組芝居『レッド・コメディ〜赤姫祀り〜』
一般券1枚のセット券です。
- ・2公演で一般 ¥9,000のところ
¥8,000でご覧いただけます。
- ・前売券および
まつもと市民芸術館チケットセンター
のみ取り扱い。
- ・予定枚数に達した時点で
販売終了となります。



それでも、猫が好き。

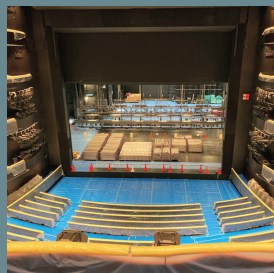
小島 有



先日、猫カフェへ行きました。1時間くらい過ごしたのですが、気づいたら心身がリフレッシュしていたのですが、疲れたら、猫カフェに駆け込もうと思いました。

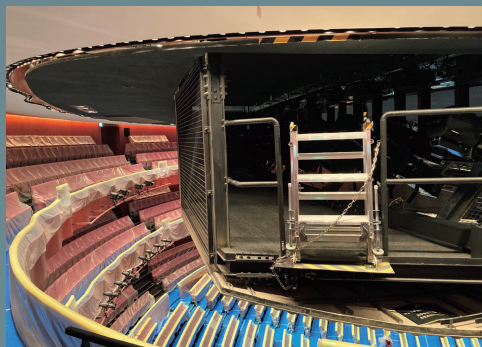
まつもと市民芸術館 改修工事始まっています

2025年9月から主ホールの大規模改修工事が始まっています。今後6月7月はオープンスタジオ、9月からは小ホールも始まり、2027年3月末まで続きます。開館から20年が経過、機材・設備の修繕や交換が行われます。お客様からは見えない箇所が多いので工事の様子をちょっとご紹介します。



現在の主ホール。客席や床はシートで覆われています。

主ホールの天井は、実は昇降できます。そのためのワイヤーの交換が終わり、照明スタッフがブリッジへ移るためのはしごが新設され、より安全に移動できるようになりました。



舞台上のバトンのワイヤーロープの交換や床板の張り替えも行われます。また、主ホール内に足場が組み立てられ、照明機器の交換が行われます。客席の一部には手すり付き、車椅子のスペースも増設します。シアターパークやエントランスの照明も順次LEDに換わっています。また、館の外側にも足場が組み立てられ、ひび割れや色落ちした外壁の補修が行われます。

改修中にご迷惑をおかけしますが、より安全にご利用いただけるように進めておりますので、リニューアルオープンをお楽しみに！
本誌でも随時状況をお伝えする予定です。



芸術館ゆかりのアーティストが選んだ

松本うまいもん

「松本の小学生は、どこの井戸の水が甘いか美味しいとか言い合っている」という話を芸術館の方から聞いて衝撃を受けた。よし、私もぜひ松本の水を飲み分けてみようと思立ち、いろんな井戸を巡って挑戦したが、「どれもこれも美味しい！」という感想しか出てこなかった。この水の美味さが、蕎麦や農産物、ひいてはこの地に生きる人々の「味の良さ」



益山貴司（劇作家・演出家・俳優）

8月に「松高事件」を題材にした新作、「松本のオフィーリア」を上演!!

につながっているのだろう。違いの分かる小学生たちは、芸術館で見る芝居の違いも味わってくれるだろうから、「益山のつくる芝居は甘い」などと言われぬよう、気を引き締めていきたいと思う。



松本の水

源智の井戸

長野県松本市中央3丁目7
[指定等区分] 松本市特別史跡
[指定年月日] 昭和42年2月1日

松本の桜の名所 弘法山



松本市東部の中山丘陵の北端に位置し、桜の名所としても知られる弘法山。実は古墳です。東日本最古級の3世紀末頃に築造された、全長66メートルの前方後方墳であり、昭和49年に発見され、昭和51年に史跡指定を受けました。出土した副葬品は長野県宝に指定され、近くにある松本市立考古博物館に収蔵されています。

埋葬者は卑弥呼と同じ3世紀に、この辺りを支配していた有力者といわれています。古墳があることは早くから知られていたものの、第2次世界大戦の末期には、その墳丘部に高射機関銃が据えられるなど、それほど重要な遺跡とは思われていなかったようです。

墳丘上からは北アルプスを背景に松本平を一望できます。昭和57年に史跡公園として整備され、桜の名所として知られるようになりました。

桜の時期になると、松本の中心市街地からは遠目にもピンクに染まった弘法山が見えます。

まつもと暮らし

松本に移住された方を紹介する企画の3回目。今回は、松本市の山間部、乗鞍高原で地域おこし協力隊として活動されている鈴木健作さんにお話を聞きました。



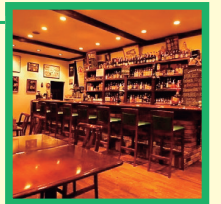
乗鞍の星空

肉眼で天の川が見える、今では貴重な真っ暗な星空。静寂の中で星を独り占めできます。



GIFT NORIKURA Gelato&Cafe

最高の相性のジェラートとラテを、圧巻の乗鞍岳を眺めながら。五感で山を感じられるリフレッシュ場所。



Cafe & Bar Spring Bank

日本一星空に近いショットバー。自分に合うお酒を作ってもらい、マスターと乗鞍話を愉しむのが贅沢な時間です。

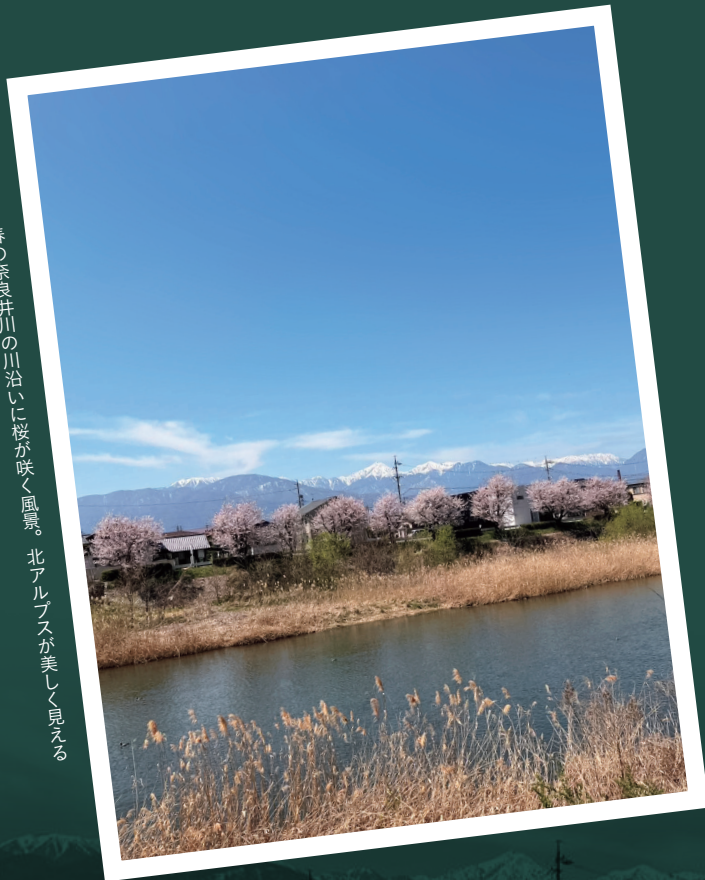


乗鞍の春夏秋冬をぜひ楽しんでください！

綴る「まつもと、景の声」

松本に暮らす人々にかつての街の風景について取材をし、創作した演劇作品「まつもと、景の声」は、2025年2月、まつもと市民芸術館2階のオープンスペースで上演されました。「まつもと、景の声」の構成・演出を担当した藤原佳奈が、その派生企画として、松本の今と昔の風景について綴っていきます。

「奈良井川の風景編」



春の奈良井川の川沿いに桜が咲く風景。北アルプスが美しく見える

奈良井川は塩尻から松本を抜けて流れ、梓川へと合流していく川だ。江戸時代には木曾川とも呼ばれ、明治以降から奈良井川と呼ばれるようになったらしい。さて、今回はこの奈良井川沿いの新橋地域に暮らす方に、お話を伺った。彼女は昭和10年（1935年）に満州で生まれ、終戦前に引き揚げてきたという。その後、24歳頃の結婚を機に、現在の奈良井川沿いの新橋で暮らすようになった。

当時の国道19号は、もちろん、今のようにコンクリートで整備されておらず、土や泥の道の上を馬が当たり前のように歩いていた風景があったそうだ。実際にご自宅でも馬や牛を飼っていたという。

奈良井川にまつわる昔の風景をうかがうと、毎年冬に近所の人たちと集まって「お菜洗い」をした話を聞かせてくれた。「お菜洗い」とは、野沢菜漬を作る下準備として、収穫した野沢菜を一気に洗う作業のことだ。現在も各家庭で行っているところはあるかもしれないが、地域の共同作業としての「お菜洗い」の風景は、いまではほとんど見られなくなったのではないだろうか。

「お菜洗い」の様子について、さらに尋ねた。前日までに家族の男手が野沢菜を畑から抜いてきて、根を切り、洗いやすいように束ね、奈良井川の川辺まで運んでおいてくれるのだそう。そして翌日、集まった女性たちが川べりに腰を下ろし、おしゃべりをしながら川の冷水で野沢菜を洗っていたという。ちなみに、昔の奈良井川は、いまのように大きな一本の川ではなく、川幅も狭く、もう少しちよろちよろと穏やかに、いくつもの細い流れが走っているような形だったらしい。

おしゃべりをしながら「お小屋」を食べ、冷たい川の水でお菜を洗いながらまた語り合う。現代の感覚からすると、むしろうらやましくもある風景だと思った。

奈良井川の川沿いからは、天気の良い日には北アルプスが鮮明に見える。お話を聞かせていただいた彼女は、家の裏から川沿いに見える北アルプスの風景が好きだそうだ。「晴れた日には真正面に常念岳、それから白馬のずーっと端から端まで、新潟県の境まで見える気がしてうれしい」と語った。

山への憧れと偶然が重なって移住

東京での仕事に行き詰まりを感じていた頃、大好きだった登山の拠点として長野への移住を考え始めました。移住の第一歩は地域おこし協力隊だと探していた際、見つけたのが松本市の募集でした。導かれるようにして、私は北アルプスの麓、乗鞍高原へと移り住むことになりました。知らない土地でしたが、想像以上に素晴らしい場所で、本当にラッキーだったと感じています。

標高1300m、遊びに忙しい日常

乗鞍では、とにかく遊びに忙しいです。冬に雪が降ればスキーへ、晴れた日には散策や写真撮影。夜には満天の星空の下、アウトドアチェアに寝転んで星空を独り占め。春夏秋冬、自然が提供してくれる遊びに飽きることはありません。一番近いコンビニまで車で30分かかりますが、遊び場が5分以内にあるこの環境が大好きです。

買い物に出かけるときは片道1時間かかりますが、

その道中も全く苦になりません。その1時間は妻とゆっくり話す時間であり、自分を見つめ直す大切なひとときです。そんな心の余裕が持てるようになったのも、松本に来てからの大きな変化です。

個人の素敵な魅力に触れる

移住してから個人経営の素敵なお店に足を運ぶことが増えました。移住前よりも出費が増えてしまったのは嬉しい誤算かもしれません（笑）。市街地に住む方々にも、同じ市内にあるこの乗鞍の圧倒的な自然を、地続きの日常としてもっと身近に感じてもらえたら嬉しいです。

乗鞍の魅力を伝える、これからの拠点づくり

現在は、2026年夏の宿開業に向けて、着々と準備を進めています。私はこの乗鞍という場所に心底魅了されました。だからこそ、新しくオープンする宿は、単なる宿泊場所にはしたくない。私が惚れ込んだこの土地の文化や自然を、訪れる人に「気づき」として伝えられる拠点にしたいと考えています。

藤原佳奈 戯曲作家・演出家。わたしたちの〈はたらき〉を聴き、上演の場をひらく。2020年より長野県松本市在住。2024年秋より、劇場実践の場「松のにわ」を始動。毎月最終水曜日出居番丸西で「米はある！」を主催。多分野で協働しながら、身体へのまなざしを分析し、再編を試みる「アートプロジェクトひとひと」を進行中。

鈴木健作 1997年生まれ。2023年8月に地域おこし協力隊として松本市安曇エリアに妻と移住。現在は乗鞍高原を拠点に、SNS発信や地域事業に携わる。2026年任期終了後、同地にて宿をオープン予定。

初回開催

3つの国の あわいで考える ディープレクチャー

「近代の歌舞伎は“中国”をどう描いたか」

あいづさんめいじのくみじゅう
日清戦争題材『会津産明治組重』の朗読を通じて考える



文化や芸術を通じて日本、中国、韓国が交流する「東アジア文化都市 2026 松本」。イベントとして1月29日、「3つの国のあわいで考えるディープレクチャー」の初回が松本市の上土劇場で開かれました。芸術監督団団長の木ノ下裕一がナビゲーターで、テーマは「近代の歌舞伎は“中国”をどう描いたか」。明治期の歌舞伎を中心に研究する明治大学教授の日置貴之さんを迎え、日清戦争(1894～95年)が題材の歌舞伎作品の朗読とともに、演劇と戦争の関係を考えました。

前半は、日置さんが歌舞伎の成立と、戦争との関わりを歴史的にとります。戦争が約230年間なく、平和な江戸時代に発達した歌舞伎が、明治の戊辰戦争で初めて戦争を経験し、同時代の戦争を描いていくようになる点に注目。歌舞伎作者たちは、旧幕臣の彰義隊が新政府軍と戦った上野戦争を実際に見て、作品に反映します。新聞などマスメディアの発達前は、歌舞伎がニュースを伝えた一面がありました。

演劇史では、日清戦争が転換点になります。明治20年代には歌舞伎とは異なる新派が登場。開戦から1



カ月余りで、川上音二郎は戦地取材をもとに『壮絶快絶日清戦争』を上演しました。伝統的な型を持たない新派が迫真の演技で人気を集め、歌舞伎は「古い」とみなされ、これを機に古典を磨く方向に向かうこととなります。ただ、日置さんは、中国人を野蛮で卑怯な存在として描く差別的な表現や、日本優位の図式は新派も歌舞伎も共通すると指摘しました。

さらに、日本の統治拡大とともに伝統演劇もその地域に広がった経緯を説明。戦争のたびに戦争劇は作られるものの、新聞やラジオ、ニュース映画の発達により、歌舞伎は名優の演技そのものに関心が移っていきます。戦争が欧米の植民地支配からアジアを「解放」する建前のもとで遂行されたため、演劇も中国との対立より、日本軍人を讃える傾向が強まりました。満州事変後、日本が国際的に孤立する中、歌舞伎は日本精神を体現する伝統文化とされ、俳優たちも戦時体制を内面化していきます。

後半では、武居卓さんと岩澤侑生子さんが『会津産明治組重 入船町貸長屋の場』(1894年初演)を朗読しました。中国人の夫昌恵と日本人の妻おぎん、息子双種が日清戦争によって引き裂かれる場面で、中国への帰国を余儀なくされる夫婦の苦悩などをリアルに再現。戦争に翻弄されるおぎんですが、当時の差別意識にもじみます。夫や息子が差別される一方、おぎん自身も旧来の身分制度で虐げられた人たちを無意識に侮辱する独白も。この言葉から、差別が折り重なる社会が浮かび上がりました。かつての戦争劇を読み直す意義について、日置さんは当時と現在の感覚の違いに對

する理解を挙げ、「そこから自分たちの感覚や常識を問い直さなければいけない」と話しました。

当日は、高校生から20代の7人が昨年末から木ノ下団長と勉強して、作った用語集も配布。明治期の新聞と戦争・演劇の関係、歌舞伎・新派劇の俳優の紹介、関連年表がまとめられ、来場した約100人がレクチャーを深く理解できるようにする試みがありました。

河原千春(ジャーナリスト)

今回のレクチャーは!

「越境する民」
—在日コリアンの過去・現在・未来
～上方落語「代書」をめぐる～

桂米團治師匠を迎え、落語という小さな窓から見える在日コリアンの所在を深彫りするレクチャーです!

日時: 4月23日(木) 18:30開演
会場: 上土劇場(松本市大手4-7-2)
※旧ピカデリー映画館

チケット: 一般 ¥2,000/U25 ¥1,000
※整理番号付自由席(未就学児入場不可)

プレイガイド: まつもと市民芸術館チケットセンター



東アジア文化都市
2026 松本
Culture City of East Asia
2026 MATSUMOTO

馬は古くから輸送や農耕、軍用など、あらゆる面で大きな役割を果たしてきた。ときには神馬（じんめ、かみうま）としてまつられた。では今は？ 市内近郊で馬と関係する取り組み、馬と触れ合える場所、イベントを紹介する。



馬搬/馬搬するヤマト 写真提供=柳沢林業

「木材生産を目的とした狭義の林業だけでなく、山の本質的な価値の理解を広め、その価値を高める林業のあり方を探って」いる柳沢林業さんには、栗毛色の社員がいる。ヤマトだ。北海道ばんえい競馬で活躍後に入社し、現在は広報部長を担う。「住まいは岡田の牧場。田んぼを耕す馬耕、山から木材を運び出す馬搬など、パートナー（犬飼哲平さん）と人馬一体となって働いています」と同社広報担当の斉藤遥香さん。

きっかけは、馬好きの原薫社長が馬搬に興味を持っていて、馬が力強く木材を運び出す姿に感動し、心に火がついたとか。

「自分は動物が好きで、体が大きいからヤマトのパートナーに選ばれたんでしょう。馬搬は注文材、この木だけほしいというときに適している。山での作業は、一般的に道を作って重機を入れて木を出します。でも馬搬は馬が通れる幅さえあればいい。馬が通ると土が掘り返されて土に埋った種が表面に現れて芽を出すから再生も早い。山に優しい方法なんです」（犬飼さん）

さらにヤマトは、馬耕にも取り組んでいる。収穫した米は、柳沢林業で「信州松本産 馬耕はざかけ米」として販売するほか、その米を使った日本酒「山瑞」も展開している。

「馬で耕した田んぼは土が柔らかい。農薬や堆肥



を使ってないので、ゲンゴロウやイモリが見つかったり、生物多様性が豊かなんです。それは結果的にわかったことですが、私たちが描いた理想の循環をヤマトが可視化してくれて、教わるのがとても多いんです」（斉藤さん）

そんな学びを一般にもシェアするイベントも手がけている。現在クラウドファンディングに挑戦中の〈暮らしの中から森を支える実践プロジェクト〉もその一つ。もちろんヤマトもプロジェクトメンバーの一員だ。「人と森をつなぐ広報部長」として今日も活躍している。

馬との触れ合いはセラピーにも

松本大学の中島弘毅教授も〈馬耕体験プロジェクト〉〈馬と人の結びつきを考える会〉を運営していた。

「2012（平成24）年から水田や里山を舞台に、米



〈馬耕体験プロジェクト〉〈馬と人の結びつきを考える会〉
写真提供=中島弘毅さん

〔馬耕に携わってくださった方々〕
松本大学同窓会副会長（当時）・宮坂勲さん/
小林畜産・小林勝社長さん/小林愛馬会・故 石原安厩会長さん、
小林克好さん/株式会社チクマスキ・故 開島達夫会長さん

づくりや生き物観察を通して、自然の恵みと命のつながり、生物多様性を学ぶ〈田んぼの楽校〉を生坂村でやっていました。代掻き、田植え、草取り、夏は泥リンピックを実施、秋は稲刈り、脱穀、最後は餅つき……。その中の最初の田起こしを馬耕で行いました。当時の本学同窓会副会長さんから馬耕をご提案いただき、小林畜産さん、馬耕の指導をしてくださった小林愛馬会さん、馬耕の犁について解説してくださった株式会社チクマスキさんの協力で実現したものです。その後、田んぼを大学近くに移して2019（令和元）年まで開催しました」

〈馬耕体験〉には、250人あまりのお子さん、保護者の方々が集まった。2018（平成30）年には〈馬と人の結びつきを考える会〉の設立記念大会、その後の大会にも全国から馬耕・馬搬をされている方が集まった。

実は、中島教授は人間健康学部スポーツ健康学部でレクリエーションを専門としている。その視点からも馬との交流は意義あるものだったと言う。「子どもたちにとっては土と触れ合う、馬と触れ合う、馬耕と触れ合うことは楽しさ、面白さでいいのです。それが心の中で原体験、原風景になれば、大人になったときに、その大切さ、素晴らし

さに改めて気づく。自然や生き物、農業が大切だという思考に結びついていく。その種まきなんです。馬との触れ合いは、身体的・心理的・社会的・知的にも効果が期待できると考えています」

ちなみにホースセラピーは、馬の温かい体温、心地よい揺れ、大きな瞳や優しい表情がストレスを軽減し、不安緩和や自律神経の調整に寄与するといわれている。中島先生はこう続ける。

「レクリエーションは、他者との良い関わりと達成感をベースとして、楽しさを生み出し、心を元気にする効果を持っています。ポジティブ心理学の創始者、マーティン・セリグマン博士が提唱した、ウェルビーイングを構成する5つの要素であるポジティブ感情、没頭、関係性、意味・意義、達成感とつながるのもであるとも言えます」

松本近郊には、松本市馬術競技場や安曇野市のホースランド安曇野、木曾馬の里の木曾馬乗馬センターなど、初心者から本格外乗りまで乗馬体験ができる施設がある。

ぜひ、今度の休日には、馬と触れ合ってみるのはどうだろう。

話=窪田雅之さん（松本文書館）
【参考】「郷土に絵馬」（日本民俗資料館、松本市立博物館）
「松本市」「国宝 松本城」「八十二文化財団」ホームページ



入山辺所^{まやどこ}の貧乏神送り（松本市重要無形民俗文化財）
2月8日、コトヨウカ行事として、藁で疫病神や貧乏神に見立てた大きな馬、ジジ・ババと呼ばれる人形を作る。藁馬を中心に車座になり、長老が鉦をたたいて、数珠を回し、念仏を唱える。その後、ジジ・ババの人形をのせた藁馬を担いで薄川まで運び、念仏を唱え、焼き払う。後ろを振り向くと追い払った厄がついて来るといわれ、一目散に戻る。
写真提供=厩所集落の皆さん



田立の花馬祭り（長野県指定無形民俗文化財）
10月の第一日曜に五穀豊穡を感謝して南木曾町・五宮神社で行われる。田立の古い文書によると290年前に東美濃地域から伝わったといわれる。竹ひごに五色の色紙を付けた“花”を鞍に飾った3頭の木曾馬が境内を3周した後、観衆が馬に飛びついて花を取り合う。花を家の入り口にさすと家内に厄病神が入らない、畦にさすと虫除けの守りになるという。
写真提供=一般社団法人南木曾町観光協会



若一王子神社の流鏝馬神事
大町を代表する夏祭り、700年余りの伝統を誇る若一王子神社例大祭。「子ども流鏝馬」は、全国三大流鏝馬の一つで、子どもが射手を努める。平安から戦国にかけて大町市を本拠地に安曇郡一帯を支配した仁科氏が戦勝祈願に流鏝馬を奉納したことに由来。その後、五穀豊穡の祈りとして続く。10騎の少年射隊が華やかな衣装をまとい、駅から神社に至る各所に設けられた白木を扇形に組んだ的を馬上から矢を射ながら神社に向かう。
写真提供=若一王子神社

時を駆ける

馬の里

～松本周辺で馬と出会う～

2026（令和8）年は60年に一度めぐってくる丙午の年。火の性質を持つ「丙」と、行動力を象徴する「午」が重なることで、情熱や勢いが高まり、太陽のようなエネルギーに満ちあふれた年になるといわれている。松本の街を歩いていると、「馬場」や「博労町」といった馬にまつわる地名や、道端に佇む「馬頭観音」を見かけることがある。この地域と馬との絆は、驚くほど古くから結ばれているのだ。

都との関係

馬と松本の物語は、『日本書紀』に始まる。都から離れたこの場所に、天智天皇が行幸する際に泊まる「行宮」が置かれたという記録がある。当時から都の人びとにとって信州は特別な場所だったのかもしれない。

平安時代に、今の松本や安曇野のあたりに、朝廷直轄の牧（＝牧場）がもうけられた。「埴原の牧」（中山埴原と推定）は馬産地として有名だった信濃十六牧の代表で、ここで育てられた（軍）馬が都へ送り出されていた。内田地区、塩尻市片丘に伝わる「ササラ踊り」の所作は、育てた馬を送り出すときの身振り手振りとして、それぞれ松本市重要無形民俗文化財（第1号）、塩尻市重要無形民俗文化財になった。

- ① 葵馬場
- ② 北馬場
- ③ 柳馬場
- ④ 天神馬場
- ⑤ 紅葉の馬場
- ⑥ 博労町
- ⑦ 六九町
- ⑧ 上馬出し
- ⑨ 下馬出町



享保十三年秋改松本城下町図 松本市所蔵

お城と馬がいた風景

戦国時代の松本は、信濃守護・小笠原氏の拠点であったが、騎馬隊を駆使した武田信玄の侵攻を受けて、その支配下に入った。深志城（松本城の前身）の5つの出入口は、武田時代の馬出と推測される。

平穩になった江戸時代、馬はむしろ庶民の身近な存在となった。

松本城の周りには町名の由来にもなった「葵馬場」「北馬場」のほか、「柳馬場」「天神馬場」の4つの馬術練習所がもうけられた。二の丸内には藩主専用の「紅葉の馬場」もあった。

「博労町」は1693（元禄6）年に改められた町名。それまでは「馬喰町」で、貢馬が集められ、馬市が開かれるなど物流の拠点として活気があった。「六九町」は、江戸時代、立派な厩舎があり、54頭（6×9）もの馬が飼われていたことに由来すると伝えられている。「上馬出し」（現・城東2丁目辺り）は、城門前に人馬の出入りを敵に知られないように築いた土手のこと。下馬出町（現・大手4丁目辺り）もあった。



岩井堂の馬頭観音 写真提供＝松本市



左／保福寺の、商売繁盛を願う中馬絵馬（1856年＝安政3年）写真提供＝窪田雅之さん

右／護国神社の絵馬
長野県護国神社本殿脇に「午」にちなんだ、縦2.7メートル、横3メートルの大絵馬が奉納されている。エクセラン高校美術科の生徒さんが制作した。

江戸の物流革命を支えた「中馬」

「中馬」は馬を利用した荷物輸送業のこと。17世紀、伊那地方で農閑期の農家の副業として始まった。それまで宿場ごとに荷物を積み替える仕組みだったが、中馬は目的地まで複数の馬で直接運んだ。山道の多い信州で人気となり、松本や安曇、諏訪を中心に発展、米、大豆、茶、塩、味噌、蚕繭などが運ばれた。幕府の公認を受けたが、宿場問屋側と争いが絶えず明治時代に衰退した。

一般の農家では家族同様の存在として、馬を母屋で飼育した。

当時の人びとの馬への感謝の気持ちは、各地の神社に奉納された絵馬で知ることができる。もともと神々に本物の馬を献上していたことに由来する絵馬。お殿様が武運を祈って奉納した、疾走する馬の絵が多くまつられている。

街道沿いには、馬の頭をいただいた馬頭観音が多く見られる。馬の無病息災を祈る民間信仰が生まれ、農家では農耕馬を、馬によって稼いだ商人は馬と歩む道中の安全を祈ったり、命尽きた馬の冥福を祈ったり、身近な馬の存在と信仰が相まって作られたとされる。善光寺街道でも一番大きく美しい岩井堂の馬頭観音は1817（文化14）年の建立といわれ、これも松本市重要文化財だ。

馬が食用になったのは、明治時代に入ってから。年老いて役目を終えた農耕馬を「命を大切にいただく」という習慣による。戦後の食糧難の時代に、安価なタンパク源として馬肉は広く普及。当時は福島、山梨、長野県が有名だった。馬肉の卸もされている小林畜産さんによれば、最盛期には北海道からも仕入れ、多くは諏訪地方に出荷されたそう。

旧開智学校と街あるき

春は新しいはじまり。木造校舎の匂いと不安や楽しみが入り混じった気持ちを思い出して、学校を描きたくなった。耐震工事を終えて2024年11月から再公開された旧開智学校。建物内の展示物も、和洋が混ざり合う建築のディテールも見応えがある場所だ。

先日、この校舎がもともとは女鳥羽川沿いにあったことを知った。明治初期に建てられ、約90年間も使われた校舎を1963年に移築・復元したのが現在の建物だ。時計博物館向かいの駐車場の前には、ひっそりと「旧開智学校跡地の碑」が建っている。ぜひ通りかかったら見つけてほしい。あの大きな建物がここに…?と意外に感じるかもしれない。



国宝になるほどなので、この建物は絵に描かれているのをよく見かける。

バーナード・リーチや柚木沙弥郎が描いた絵のポストカード。誰かが趣味として描いた油絵。近くの小中学生が写生会で描いたアクリル画。どんな絵も、この人は建物をこう捉えたのかと想像するのが楽しい。

そこで、私は学校の正面ではなく裏から見た風景を紹介したい。中を見学するのも良いけれど、日常生活の中で気軽に眺められることも贅沢だ。桜とこぶしの花が咲くころが最高の散歩日和で、ちょっとした広場があってひと休みできる。あなたが絵に描くとしたらどこを切り取るか教えてください。



Illustration & Text
otama

太田真紀/イラストレーション、ビジュアルストーリーテリング、またそれらを軸としたデザインなどが得意。デザインファーム・Takramでの勤務を経て、2021年4月よりイラストレーターとして独立。松本に住んでいますが、まだまだ知らないことばかりです。
otama-ki.com



[特集]

時を駆ける馬の里 ～松本周辺で馬と出会う～

vol.
09

2026
Spring

ねんあ

